

組合員であることは

ついでこの間、会社の関係二人と新宿で飲んで折、いふことながら話しは会社の内部問題に及んでしまった。しゅっちゅう言葉交している関係なので、相手もこんな考えを持っているか、おおよそ見当はついていてるのですが、酒にあおられた形で激論になり、今にもくぐぐぐの喧嘩ではじめのうな様相を呈したまま、結局、同様の引きわけということになりました。そして帰り際、でも今日は面白かった、と関係の一人が言い、あとの二人も自然にうなずいて、どうやらこの酒宴はにない酒をあおるものではなかったようでした。

同じ意見の対立でも、組合の集会の場でのもの程後味の悪いものはありません。ほとんど言葉のかみあひも感情のこじわりもありません。砂をかむような想いを抱くのが常で、う、組合内部では、番手と主として教団話しあひが行なわれているところですが、資本家と労働者の対立が一応無いという条件の下なので、他の労組と異なり、一見のんびりしたものです。ただのんびりした中にも、労働組合といふは誰しもが抱く一筋をいからせ、表情も乏しく、堅苦しい正しい意見が空をよめる会談のイメージは、いささか失われていません。先日、その集会の内の一團に入席しました。何という理由はなく、すっかり忘れていたのです。翌日、なぜ来なかったの、と問われてやうと気が有るで、我ながらそのえ、かげんにおかしくなつてしまいました。ところが後で聞けば、当日これが大変問題になつたようで、組合員としての最低の義務を欠く、ということとてたいそう批判されたそうです。これを何かにつけて集会をさし、もめるもそをつくつていたへーほくとしては集会がお通夜になるのをすくつていた、と思つてゐるのです。か、い、張本人が何の前触れもなく出て来ないということ、何だ、けしからんじやないか、云うことはあつてもそれだけのことをしない者に傳へよう、ことと云わせておく理由はない、ということなのでしょう。ほくの他にもう一人、せがデパートと家で休まりました。その集会ほもっぱら、その

二人をこきおろすことに終始したようです。こんなくだらんことはもちろん一笑にふすにこしたことではないのですが、現在の組合のいきさまについている原因が、何のことはないこの世のどこにあるので、まずここを打破っていくのは無意味なことではありません。

まず、組合員の義務、なんぞといわれるとむしろが走る、というやつで、ほくとしては云いたいことのひとつもみん前の前という機会を失なつたのですから、義務どころかみすけす権利を逃したようなものです。それは誰に云われるまでもなく、自ずからの主体に対してその不注意もたらしたものに自覚的であつてもりです。つまり一回、二回とつづいてきた話しあひの中から何とかはくかなりのリズムをつくり出し、様々な反応や雰囲気を見ながら次回へ持っていくとしていた企図が、半ばくすねたのですから、それに對しては率直であつたと思います。ところが、ほくにむけられている批判は、そうした主体の問題なんかどこかに置き、ただやみくもに組織の個人に対する抑圧の機能をふりかざし、個人を組織の奴僕におとしめるものでしょう。以前、これにはよく似たケースで一人の女性に自己批判を書かせ、みんなの前で読みあげたということですから、この態度はかなりの程度まで抑止してゐるようです。

それと関連して気にかかることは、そういつた種の批判がふだんの仕事の相向の雑談の折には全く姿を見せないこととです。あの妙にこわばつた、それでいて肌にもとわりつてくる陰湿な集会の雰囲気、その種の批判を醸成するのに欠かせぬものなのかもしれません。

それにしても、あのおとなしげな彼女が、当然出るであうう批判を知りながらデパートに行ったことは重要な気がします。しようこりもなく、組合員の義務などという言葉を御用し、けいてゐる連中は、彼女の胸中を想像だにしたのでしよう。でも、ほくには分かる気がする。そう、彼女は決断したのです。面白くないものは面白くないんだ、だから面白い方を迷ふんだ、と、文句をいわれるのがいやに、しぶしぶ出席している者より、そうした目に見えぬ力からめけ出そうとした彼女の態度の方が、比べものにならない程貴重なものなのです。一見、組織に反するようありませんが、より深いところで、組織の本質に迫る何かがあるからです。

次の集会では、いまつとしたら二人して組合員にあげられるかもしれないけれど、女性と二人でというのほなかなめつな儀式にならやもしれません。また喧嘩も度々で、またので、その日を心待ちにしています。

赤軍の暗殺

へのアプローチ

連合赤軍の同志大澤廣毅について、何井さんのイオム通信に之しのぶ著者に記される意味で、何とか言葉にしてみようと思う。

先日、以前の立場を譲り途中スッコーケールへの仲間一人と其の件について話して、二人は強い反感として嫌のあったことがある。それは、赤軍内部崩壊していくプロセスは、ぼく達の政治的立場によく似てゐるのではないかとこのころに思つた。

ぼく達の政治立場ともう一度振り返ってみると、運動を實際や場合にも共に生活する場合にも、個人の主体性が最も大切なものとこれこそその主体性というものは、他者へのいたわり、優しさといったものは他者に対する尊重するものである。という考え方を、つまり意識的に排除されるというように運動のものだった。それは、日常の様々な具体的問題についてお互いが意識し、主体性を示している者に対しては、かなり徹底してその非を追求することになる。他者に対して態度であることが自己に対して態度であることと、同じである。それの異なる者な主体的な人間であるという考えにもとづいてから運動は、だから自分から主体性を示していると思つた者は、即ち自分自身の監視の下にあるものなもので、そのことがその人間より随分うつつに即座にして、それは示してもおんなの世評をかうことになる。そうしてこの監視の厳しさを精神的に追いつめられ、耐えきれず組織を去る者には、罵詔雑言、裏切者として容赦のない切り捨てが行なわれる。その際、それに内部から異論を出すことはそれまでの組織論そのものと対立せざるをえず、それに対しては組織論の側から異論を出した者の主体性を問ふという切り返しが行なわれ、ほとんどの場合、そういう声はかき消されてしまう。結局、少数者の積極的な切り捨て行為と多数の者の監視とによって、それは完了する。

その時の組織の状況は、切りすめられた者の位置に近いものは、不安にさいなまれながらも、しかし、自分ではなくてよかつたと思ふの面をなぞあらし、そこから遠くにおいて明日は我輩かと案じる必要のない者は、これで組織の幹がなくなり、組織の結束力がゆるむだらうと期待するとともに、一時的である自己の切れ味の鋭さに内心満足をもって、自己より先に脱落するであらう者が多い

ればいる程、その刃は鋭さをまし、少くなればそれに比して鈍くなり、そのぶん不安感を増大する。だから、その組織の奥情は次のようにいえる。常に組織の頂点にいる者以外は、多かれ少かれ、脱落者の汚名をさせられる危険を感じながら、自分だけは落ちまいと必死に主体的なうつつを磨いていた、と。

赤軍の場合おほんと同様だっただらう。そしてその政治的立場はぼく達とは比べものにならない程強みに各個人に作用しつづけたことだらう。脱落することは死を意味しにんだから。

結局、政治革命をいいながら、内部では出発からしてその政治に敗れていたといえる。その組織的政局を救う道は立ちどまって内部の政治を監視し、その組織構造に穴をいれることしかなかった。ところが彼らはより突進を走った行動をすることと、そしてその過程で立ちどまられていく者を無慈悲に切り捨てることで、組織をかためようとした。次々と暗殺していかねばならなかったのは、この組織の、この政治の途を進む限り、必然的である。

昨日の新聞は永田洋子の面会に両氏が二度にわたり行き、その時の差入をみたと言つてゐた。同じ所下、何となくして見ても親とは関係ない、という永田の談話のつていたこれは天啓的である。赤軍の組織の結束論が、実際は関係は無いもなくあるのに、関係はない、と云ひきつてしまふ。入思ひ込みでしかないことをよく物語っている。ぼく達の場合も、岡田氏はよく、自分は天啓的だが、君達も親との関係をきれ、でなくてはこの事業はできない、と云つたものだ。そこから、その組織論や運動論がうまれる。つまり、〇〇しかない、という唯一者意識の発現として。と同時に、現実の中で誰かな革命の道をつかめていないという焦りと、自己を一抱にふっさした革命者の位置へおしあげたいという気持を少なからずもっている者達が、唯一者意識を持つてゐる個人の入思ひ込みをトクマ化してしまふ必然性に振られていないようになんか思ひ込みによって、うまれた運動や組織は、傍目には大きく歪んであつて、早晩、内部から崩壊していくより遙か早い。おそろく、ぼく達の場合と同様、新たな運動や組織の発は、この事件にこだわりの、最後の血の一滴まで見つづけることからしかはじまらないだらう。マス、コミや世間の馬鹿騒ぎの中で自己に曲いつづけることは苦しいけれど、確かな斗いのためには避けては通れない。